宮島さんの死に際して思う

金はいらん、命返して

この言葉を支えに闘う

新港町作業所　加藤秀雄

「金はいらない。重信を返してもらうと、何も言わない」

第三者が聞けば、「何んと無理な事を」、と思う事だろう。

死んだ者を返せといっても、現実には返せるものではない。そういって、金を取れるだけ取ろうという魂胆だな、とも思われるかもしれない。が、私は絶対にそうではない、と自信をもって言える。

炭鉱で働く労働者は、常に危険と闘いながら働いている。一つ間違えば、死か、それとも片輪だ。それだけに保安がどれ程大切なものか、私たちは身にしみている。

しかし会社は三池争議以来、生産第一の施策を強行するために組合を分裂させ、差別、いやがらせ合建等、あげれば数えきれないほどあくどい手段を講じ、第二組合優先の作業によって生産をあげながら、保安は完全に無視され、死亡者・ケガ人は増加していった。

「このままでは、いつか大きな災害が起きるぞ」、とささやかれはじめ、それがしわ寄せされて、昭和三十八年十一月九日のあの三川鉱大爆発となり、一瞬にして四百五十八名の死者と、八百三十九名のCO中毒患者を出したものであの災害はほんとうに、起るべくして起きた人災であったと私は信じている。

資本主義社会とは恐ろしいものだ。世界の歴史に大きな汚点を残したあの大災害をひき起こしながら、責任者ども は不起訴となり、かえって栄転し、中には栗木幹・当時の社長の如きは、国から勲章さえ受けるのだから。

一家の大黒柱だった夫も、親も息子も亡くしてしまった遺族は、わずかな弔慰金で放り出され、争いの中から手にした遺族救済のための縫製工場、アンニット工場でも、遺族たちは思いの外の悪条件の中で働かされ、生活につかれては自殺者さえ出した。

CO患者も、また同じである。人間の命をあずかる医師が会社とぐるになり、「中毒症は治った」と診断し、「もっと治療してほしい」と頼めば、社会に向って〝組合原生病〟と公言する。

いまだ治りきらない身体をムチうって坑外の軽作業に出ると、会社はさもCO患者を目ざわりの如く人目のつかない万田作業所や新港作業所に放り出す。

低賃金と病気のため家庭生活は破壊され、奈らくの底ではいずりまわっている。

だからといって、遺族や患者、患者の家族が鉱長に面会を求めれば、会社は戸には錠前をおろし、ガラス窓には金網を二重三重、四重に張りめぐらし、放ったらかしておけといわんばかり。

ためにに一週間待ってくれ。宮島さんの遺体は、会社が責任をもつ―といいながら、三日目には「業務命令だ。ひきあげよ」となり、会社側のこの姿勢が、宮島さんの死をめぐっていよいよはっきり出てきた。

社葬の時、誠意ある回答をする会社幹部はひき揚げてしまった。怒った職場の仲間が三川鉱に抗議にゆけば、入り口にはバリケードを張りめぐらし、三池新労組員や組夫を千人近くも動員して待機させ挑戦する。

会社回答を、首を長くして待っている遺族の気持を踏みにじり、「私たちがゆけば不隠な事態が起る恐れがある」からと、「組合から話してくれ」という。

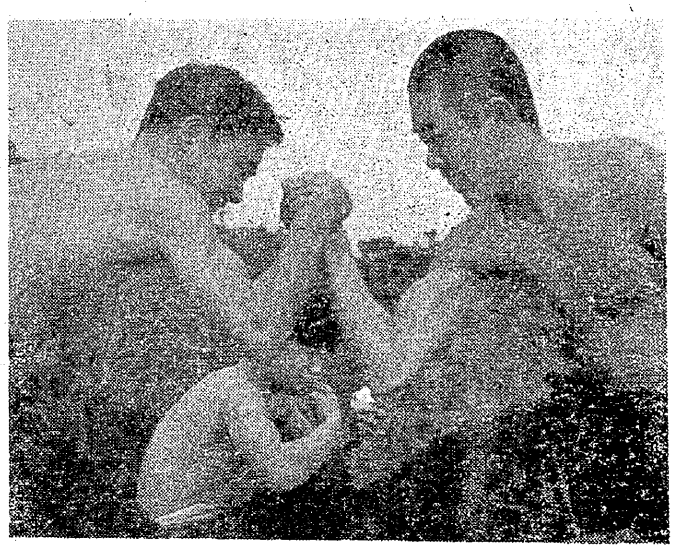
なぜこのように、恐れるのか。私は、会社がこれまですべての被害者に責任をとっていないからだと判定することができる。

労働者も人間である。機械や道具などとは違う。ドレイでもなく憲法に人権を保障された人間である。

青春も、恋も、楽しい家庭も、そしてよろこびも、すべてをこの災害で奪い去った会社の責任は重大であり、金でかたずくものではない。

「金はいらん、重信を返して」

三池大爆発裁判の原告でもある私は、この言葉を口ずさみながら「最後まで闘うぞ」と心に誓っている。



腕の力くらべをしている宮島重信さん。（鉱山学校時代で、向つて右の人）

抵抗呼び起した社宅集約計画

労働条件の向上が先

大谷地域分会　断固反対闘争へ

周知のように、三井鉱山はすでに十年も前から大谷社宅をつぶしながら、三井グリーンランドを造成してきているが、このほどいよいよ多数住民の意志を踏みにじって、社宅撤去を強行しようとしてきており、重大問題化するきざしを見せはじめている。

会社が、「社宅の集約化計画」として組合に提案してきたのは、昨年末のこと。

それによれば対象となるのは東谷、四山、大谷、それに原万田二区の各社宅のほか、新港、万田なども。

それぞれに理由をあげているが居住者の希望や意志を踏みにじって強行しようとする態度は、絶対に許されず、三池労組として「こんな強引なやり方はおいそれと認められぬ。そんなことより、組合員にいっそう切実な要求である〝福利厚生〟の改善こそ先決だ」と反対の態度をきめている。

会社がこんどの計画で対象にしている社宅の一つ―大谷社宅（地域分会）では、ひときは「社宅立ち退き反対」の動きがはげしく燃えあがっている。

同地域分会ではいち早く、次の基本態度を明らかにすることにより、まわりの朝日丘団地に住む人びとにまで呼びかけながら、闘いをすすめている。

基本態度というのは――

(1)現在、人間が住んでいる社宅であり、直ちに必要な改善を行なうこと。

(2)戦時中憲兵を使って接収した土地であり、三井は市民にこそ解放し、市は低所得者向きの住宅地にせよ。

(3)移転予定先はかえって老朽社宅であり、会社は近代的な社宅を新築し、社宅入居を希望しない者、商店、その他に代替地、補償を充分行なうこと。

(4)いずれにせよ私たちは、「グリーンランド化」に反対する。

こうして大谷地域分会は、断固として社宅立退き反対の闘いをすすめているが、なお三池労組ばかりでなく、新労組員、組夫、関連会社、商店、一般、団地などで生計を営んでいる人びとにも広く呼びかけ、結集をいそいでいる。

ともあれ〝大谷ニュース〟（NO・三三）も訴えているように、「石炭斜陽化や炭鉱合理化のあやまりが明白になった今日、エネルギー政策が正しくうち立てられ、唯一の国内資源である石炭を有効に使い、極端に低劣な炭鉱労働者の賃金・労働条件を改善させる」方が先決だ。（上の写真は、立看板でのアピール）

× × × × ×

先の宮島さんの非情な死が、ブラウン管や新聞で伝えられますと、全国の働く人びとの間に広く波紋を呼び起こしました。各地で追悼集会が開催され、改めて「生命を守る闘い」「反合理化・反独占の闘い」を強める決意が固められ、三池との連帯が確認されました。福岡守る会や久留米守る会は、組合葬に参加するばかりでなく、街頭カンパを通じて市民に呼びかけ、患者家族や遺族を招き交流をはかるなど闘いの輪が広がりました。私たちの責任はいよいよ重いのです。

火花

東京都豊島区の鍵山さんから便り

一月六日、宮島さんが亡くなられた事を新聞で知りました。私達はちょうど一年ほど前から地区の婦人が集まって〝ねりま婦人のつどい〟というあつまりをもっています。月に一度で、昨日（十四日）一月のあつまりがありました。

そこで一月の討論議題は「労働者の生命と健康破壊」で、三池の宮島さんの死を例にあげて話し合いました。

最後に〝ねりま婦人のつどい〟として、三池労組へのカンパと手紙を書くことになりました。すぐカンパは集まりました。

とりあえずその分とは別に、これは私の分として、少くて恥かしいですがカンパを送らせていただきます。

皆様のご発展とご健康をお祈りしております。

東京都豊島区上池袋四―一七の一五　長田様方

鍵山とし代

×

新港町分会の竹林博さんを通じてよせられたものです。ほかの分は割愛させていただきます。

宮島さん死亡の事実を通じてアピールした〝福岡守る会〟のビラ。

東京都庁でも、このビラが配られ、宮島さんを死に導いた資本への怒りの火が燃えていた。